

北京ぺきん雍和宮ようわきゆう

弥勒大佛開光（開眼）慶典記念に参列

横浜善光寺留学僧育英会理事長 黒田武志

十月十四日、北京最大のチベット仏教新派黄教雍和宮において、世界最大の白檀一木造り弥勒大佛（地上一八メートル、地下八メートル）の開光（開眼）式典が行われ、拙僧夫婦は招待を受け参列しました。

この弥勒大佛は一九九〇年八月に完成されたもので、式場は法輪殿と万福閣の広場に特設されました。式典は、加木揚吐布丹住職の歓迎の挨拶、参列来賓の紹介が始まり、次に仏教聖歌演奏の後、中国仏教会を代表して趙朴初先生が「この佛縁は中国の多くの人々の喜びとするもの」と、開光式の祝辞を述べられました。続い

て北京副市长阿魯明女史は、「雍和宮は、静寂に包まれた御殿で、清の雍正帝が即位する前は、王府であり、一七七四年にチベット寺院となり、現在はチベット、蒙古族の信仰の場であり、本日開光の大佛は、ダライ・ラマ七世より贈られたもので、今後は多くの方々の信仰の拠り所となり、無限なる佛様の功德がいただける」と、大佛の紹介と雍和宮の歴史的意義を説明されました。

その後、各仏教界代表の挨拶やラマ教の活佛と言われる方々の祝辞が続いた後、読経に続いて開光式に移りました。

住職はじめ高僧、来賓の方々は、万福閣の中
にまつられた弥勒大佛の前に集まり、白い布(カ
タ)やお米を捧げました。白い布(カタ)は佛
様に対する尊敬の意味を表わし、お米は、芽が
出ているいろいろのものを実らせて吉祥を作ると言
われています。

佛前の供え物は、内供(お酒、水)、外供(果
物)、密供(お経)と同時に、自分の心をも全て
大佛にささげる供養の式で、四十分ばかりで式
典は終わりました。

式典にはアジア各国大使、外交官、中国、日
本、韓国、台湾、チベット、モンゴル仏教会代
表、キリスト教代表、アメリカ、ヨーロッパか
らの信者、その他の方々が集まり、その数は世
界二十カ国より二百名、その他一般の参列者は
七百名を越えていました。

開光式の後は、雍和宮の正面、天王殿の前に
設けられたステージで、ラマ僧による金剛驅魔

神舞の踊りが奉納され、ここでは、善光寺留学
僧育英会名誉顧問・天童寺明暘禪師と並んで舞
踊を観ることができて、光栄に感じました。

拙僧夫婦が式典に招かれたのは、雍和宮廟務
委員会委員嘉木揚凱朝師を第十回善光寺育英生
として受け入れた縁によるものです。

嘉木揚師は十月二十一日来日、愛知学院大学
に留学することになっています。愛知学院大学
小出学院長先生はじめ、前田専学教授、引田弘
道助教授、又、多くの先生方の御配慮、御好意
に心より感謝すると共に、今後も、佛法興隆の
ため、微力ながら尽力することを強く感じた次
第です。

せっかくの中国訪問なので、翌日、天童寺参
拝に向いました。天童寺では、修祥監院老師に
心からのもてなしを受け、今後の親善交流を願
いつつ、しっかり手を握りあって、別れを惜し
みました。